

クルレンツィスとともに

——クルレンツィスが首席指揮者に就任して、やっとシュトゥットガルト放送交響楽団とバーデン・バーデン・フライブルクSWR交響楽団との統合が完成しましたね。

「大変でしたが、うまくいった方だと思います。もつと悪い状況になっていても不思議ではないくらいです」

——音楽的にまったく違った方向性を持った二つのオーケストラを一緒にするのは至難の技だと思えます。

「SWR（南西ドイツ放送）のインテンダントが経費削減のため、「二つもオーケストラは必要ないから、一緒にしよう」と、音楽的なことなどわからずに決めたのです。でも、両方のオーケストラが同じ高レベルだったので救われました。有名なオーケストラと小さな楽団との統合の方がもつと難しいと思います。そして、2年前の統合以来、不満を抱えていた一部の団員も、クルレンツィスが来てから皆が満足しています」

テオドル・クルレンツィス初来日を前に、彼を首席指揮者として戴く南西ドイツ放送交響楽団のコンサートマスターに、クルレンツィスと共に歩む新時代の幕開けと、希望にあふれた未来について語ってもらった。



オーストラリアからドイツに留学し、コンサートマスターになったチー。女性のほうがコンサートマスターに向いているのではと語る

ナタリー・チー Natalie Chee

1976年、オーストラリア・シドニー生まれ。4歳でピアノ、5歳でヴァイオリンを始める。シドニー音楽院の教授であり、シドニー弦楽四重奏団のメンバーでもあるアレックス・トディチェスクに師事。高校生でオーストラリアの全オーケストラとソリストとして共演した後、1994年にスイスに留学。ベルンでイゴール・オズィムのソリストクラスで学ぶと共に、カメラータ・ベルンの第2ヴァイオリン首席奏者も務める。ティラミス（後のモーツァルトピアノ四重奏団）を結成。1998年に優秀な成績で卒業後、2000年から2009年までカメラータ・ザルツブルクの首席コンサートマスター。2009年、シュトゥットガルト放送響の首席コンサートマスターに就任。それ以外にもBBC客演、ヘーゲル四重奏団などで活躍。

——どのような経緯で彼が選ばれたのですか。

「10人ほどからなる諮問委員会で、多くの指揮者の名前を出して検討しているうちに、誰からもなく「テオドル・クルレンツィス」という名前が挙がり、それから満場一致で決定されました。実現する可能性は低いと思っていたのに、彼は快諾してくれました。すでに埋まっていたスケジュールを私たちのために空けて、今シーズン、5回の定期演奏会を組んでくれましたが、来シーズンはもつと来てくれることになっています。彼にとつてもメリットがあつたと思います。ドイツにまだ根を下ろしていない彼が、例えばバイエルン放送交響楽団などを振つたとしても、そこには伝統があつて、新しいことをするのは難しいでしょう。逆に私たちのオーケストラは新しいアイデンティティを必要としているので、ちょうど双方のメリットがピッタリと合つたのです」

コンサートマスターの仕事

——彼の何が特別なのでしょう。

「まずはオーフでしょう。そして、われわれ音楽家を感動させることができるので、聴衆も感動させられるのです。そのうえ、彼は自分のやろうとしていくことに確信を持っています。去年のブルックナー「交響曲第9番」の客演は客席で聴いていましたが、腎臓結石を圧して指揮台に立ったのにもかかわらず素晴らしい出来で、興味を示さない時は、椅子にふんぞり返って弾いている一部の団員も、椅

連載

世界のコンサートマスターに聞く
Interview with Concertmaster in the world

第46回

ナタリー・チー

（南西ドイツ放送交響楽団第一コンサートマスター）

Natalie Chee-The first concertmaster of SWR Symphonieorchester

取材・文＝中東生 Shinobu Naka

子から身を乗り出すように嬉々として弾いているのが印象的でした。就任コンサートはマーラー『交響曲第3番』でしたが、まず第1楽章では弦と管に分けて練習しました。これはとても効果的でした。その後、第4楽章を長い間練習しました。痛みと共に弱音で始まるこの楽章を、毎回違ったアプローチですと練習しているうちに本番が迫り、さすがに不安を抱きました。第2、3楽章は手付かずだったので、でも最後にはすべての楽章を練習でき、本番を迎えると、その練習方法の効果が解ったのです！長い交響曲で疲れて辿り着く、これまた長い第4楽章が、完全に自分たちのものになっていたので、自然に、感動的に弾くことができました。ゲネプロに來ていたマネジメントの人たちも

**目標は、クルレンツィスと共に
世界屈指のオーケストラにまで
上り詰めることです**

「わけもなく涙があふれた」と言っていました。クルレンツィスにとつてこの最終楽章は、何か彼の人生と呼応するものがあるのではないかと思います」

練習中はどんな指示を出すのですか。

「技術的なことよりも、魂について、喜びや傷、憧れなどについてたくさん話します。ともすれば非現実的にも聞こえますが、彼の奏でさせる音楽と相まって初めて正確に理解できるのです。彼は音楽を通して語るのです」

— それではコンサートマスターとしては楽ですね。

「はい。コンサートマスターという仕事は女性に向いていると私は思います。コンサートマスターの重要な役割は、上手に弾くことはもちろん、団員を團結させ、そして指揮者のやりたいことを団員に理解させたり、両者の間に入って、揉めごとが起きないようにすることです。よく男性団員はオーケストラの意思を尊重しない指揮者に対して「もっとアグレッシヴに出ないと」などと注文を付けますが、建設的に対処すべきで、争い

「最初は家に、誰も弾かない曾祖母のピアノがあった、幼稚園で習った歌を弾いていたらしく、母が私の音楽性に気付いてヤマハ音楽教室に通わせてくれました」

「最初は家に、誰も弾かない曾祖母のピアノがあった、幼稚園で習った歌を弾いていたらしく、母が私の音楽性に気付いてヤマハ音楽教室に通わせてくれました」



クルレンツィスはいまや、このオーケストラの夢を実現するシェフとなった。2018年9月20日にシュトゥットガルト・リーダーハレで行われたクルレンツィスの就任コンサートから、マーラー「交響曲第3番」を演奏した。アルトはゲルベルト・ロンベルガー ©SWR Matthias Creutziger

通い始め、オーストラリアの全オーケストラとソリストとして共演しました。でも、早いうちに欧州へ行きたくて、カセットを送り続けていると、ベルンで教鞭を執っていたイゴール・オズィムが気に入ってくれて18歳で渡欧しました。すぐにカメラータ・ベルンの首席第2ヴァイオリンに選ばれ、そのうちコンサートマスターも経験するようになりました。2000年にはカメラータ・ザルツブルクのコンサートマスターに就任し、それ以来ずっと務めています」

— コンサートマスターのポストを手に入れた貴女の将来の目標は何ですか。

「クルレンツィスと共に世界屈指のオーケストラにまで上り詰めることです。彼が首席指揮者に就任してから、ハンブルクやウィーンなどの客演がどんどん決まり、ウィーンにはザルツブルク音楽祭のインテンダントが聴きに來ていて、すぐにザルツブルク・デビューも決まりました！個人的には、人生の最後の日まで、情熱を持って弾き続けていくことです。オーケストラに入ると、つい慣れて次の休暇を楽しみにしたりしてしまうので、この目標を掲げたいです」

「最初は家に、誰も弾かない曾祖母のピアノがあった、幼稚園で習った歌を弾いていたらしく、母が私の音楽性に気付いてヤマハ音楽教室に通わせてくれました」